

令和5年度(2023年度)

【課題】 次の文章を読んで、この筆者の考えをあなたはどうかとらえるか。また、それを踏まえて、あなたはどのような教員を目指したいと考えるか。900字以内で述べよ。

答えは確かに<ある>。それが初等中等教育における「問題」の大前提である。そして先生はその答えを知っている。その正しい答えに、どうしたら自分たちも到達できるだろうか。先生が知っているはずの答えと自分のものが一致すれば正解で、間違っていればバツ。それが入試試験も含めて、高校までの試験の問題であった。

考えてみると、これは怖いことではないか。なぜなら、小学校から高校まで、誰もが一貫して、問題には必ず答えがあるということを前提とし、正解は必ず一つであると思い込んできたのだから。教師の側も、答えが二つも三つもある問題は避けてきただろうし、答えのない問題は出しようがなかった。

どこかに正解があって、その正解は自分が知らないだけであって、誰かが(たぶん誰か偉い人が)知っていると、頭から思い込んでいると、その呪縛のまま、大学においても同じスタンスで教育を受け、そして社会に出ていく。そんな社会人ばかりが増えていくと考えることは怖いことではないか。

(永田和宏『知の体力』より)

【自己評価チェックポイント】

- ①筆者の考えを的確に理解しているか(序論)
- ②筆者の考えに立脚して自身の考えを述べているか(序論)
- ③どのような教員を目指したいかを序論で明記しているか
- ④出題者の意図(なぜこのテーマを取り上げたかという背景)
- ⑤論点がズれることなく常に「答えのない問題に自ら考え答えを見出せる力を育む」という論点に帰着しているか)
- ⑥適切な実践例も踏まえ(「答えのない問題に自ら考え答えを見出せる力を育む」という論点に沿った実践例、具体例の挙げ方ができているか)
- ⑦基本的に「だ・である」調で書けていたり、「～とか(「～や」が望ましい)」「自分は(私は望ましい)」など、印象を下げる表現がないか

A評価	上記①～⑦が満たされており、書いている具体例・実践例が優れている。
B評価	上記①～⑦が満たされており、書いている具体例・実践例も過不足ない。
C評価	微妙な論点のズレや具体例と主張の関連性の不明感が少しあるが、上記①～⑦は概ね満たされており、書いている具体例・実践例も過不足ない。
D評価	基本的な文章表記はできているし、記述内容から教員としての熱意もわかるが、①～⑦の数点について明らかに欠けている。
E評価	①～⑦の全てにおいて明らかに欠けている。

※上記の評価は、あくまでも金井の個人的な基準であるため参考程度にしてください。